

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23601016

研究課題名(和文) 離島の子どもたちの身体観・健康観・医療観と医療環境とのかかわりに関する人類学的研究

研究課題名(英文) An anthropological study of children's perceptions of their body, health and medicine and their relationships with island medicine

研究代表者

道信 良子 (Michinobu, Ryoko)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授

研究者番号：70336410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：北海道利尻島と沖縄県波照間島では、本土の医療を好んで受診するという「離島医療離れ」が見られる。これら離島社会における子どもたちの身体観・健康観・医療観は親世代のそれとは大きく変わらないが、祖母世代と親世代の間には明らかな違いが見られた。その連続性/不連続性が生じる要因には、親を含む移住者の増加による価値観の多元化や、伝統儀礼の衰退・復興等の社会構造の変化がある。「離島医療離れ」が子どもたちの身体と健康にもたらしている現象には、都市部の医療に依存するがゆえに起こる受診の遅延や抑制、それにともなって生じている子どもたちの身体状況の格差がある。

研究成果の概要(英文)：People living on remote islands around Japan generally prefer the medical care provided on the mainland to that on their own island. This is definitely the case on Rishiri, Hokkaido, but it is not so clearly the case on Hateruma, Okinawa. We assumed that such a discrepancy is due to differences in the medical systems on those islands. Children's perceptions of their body, health and medicine are close to those of their parents' generation, but are clearly different from those of their grandparents' generation. The factors contributing to this continuity/discontinuity are changes in local values, information technology, and social structures resulting from an increase in immigrants from the mainland. Due to the absence of pediatric care, parents sometimes postpone or refrain from taking their children to medical institutions. Such parental behavior is apparent among the impoverished households in Rishiri. This contributes to discrepancies in children's physical condition and health.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学(子ども環境学)

キーワード：子ども 身体 健康 医療 離島社会 人類学 環境

## 1. 研究開始当初の背景

日本では 1953 年に離島振興法が制定されて以来、離島の自立的な発展が促され、それに伴い離島医療も整備されてきたが、少子高齢化と人口の減少により、専門医の配置や高度な医療機器の整備までは望めない状況にある。それゆえ、限られた医療資源の下では、最低限対応すべき健康問題を抽出し、診療体制や診療機器のあるべき姿を検討することが重要だと指摘されてきた(今道 2009)。

そうした最低限対応すべき健康問題として、小児科医の不在が引き起こす子どもの「離島医療離れ」が挙げられてきた。子どもの親たちが島内の診療所よりも都市部の基幹病院を好んで受診する傾向が見られることが指摘されてきたが、こうした傾向が子どもたちに離島医療に対する不信や否定的態度を芽生えさせ、病気の発見の遅延や健康状態の悪化といった事態を引き起こしている可能性が考えられる。

子どもたちの健康を考える上でも、また、離島医療の存続を考えていく上でも、子ども達が医療についてどのように考え、また自分の身体や健康をいかに認識しているのかを明らかにすることは焦眉の課題である。

しかし、既存の日本の保健医療政策においては、子どもの身体観、健康観、医療観への着目は不在である。また、小児保健の研究においても、子どもの発育や健康に影響を及ぼすとされる遺伝要因・環境要因の解明やそれらの関係性を明らかにしようとするものが主流であり、子どもは子ども同士の間で独自の身体観や健康観を培い、あるいは親や親族、医師による治療や手当ての経験を通じて医療に対する固有の考えを発達させるといった視座を持ち合わせてはこなかった。こうした状況に鑑みれば、離島社会における子どもたちの身体や健康に関する観念への着目が、今後の保健医療政策に必要不可欠であると措置することができる。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、離島社会に生きる子ども達がいかなる身体観・健康観・医療観を有しているのかを明らかにすることを第一の目的とした。対象は学童期の子どもとしたが、それは小学校就学前とは異なり、自分の考えをことばで表現する力が備わっていると想定されたためである。さらに、本研究を応用人類学的に展開させる目的で、親世代の身体観・健康観・医療観も明らかにし、世代間の観念の位相を明らかにすることに重きを置いた。それにより、現在生じている、あるいは、今後起こりうる現象を的確に把握することが可能であると考えた。

また、「離島医療離れ」が子どもの身体と健康にもたらす影響を明らかにし、子どもにとっていかなる医療環境を整えることが必要とされており、また、そのために地域の医療資源をどのように活用することができる

のかを検討し、提言型の研究として大成させることを第二の目的とした。医療資源を医療者、医療設備、医療予算、医療知識及び医療技術の全てを包括する概念として位置づけ、これら資源のいかなる活用が今後の離島医療の多様性と持続性に繋がり得るかを検討した。

## 3. 研究の方法

調査地は、これまで現代医療と伝統医療の双方の医療者に依拠しつつ、身体の不調への対処方法を独自に発達させてきた北海道利尻島と沖縄県波照間島の 2 つの離島とした。

平成 23 年度は、それぞれの離島における社会の実態や文化の様相を文献調査とフィールドワークを通じて明らかにした。平成 24 年度には、利尻島と波照間島における学童期の子どもの健康状態と、子どもと親世代の身体観・健康観・医療観を比較調査した。また、離島における子どもの健康と医療に関する文献レビューも行った。平成 25 年度には、利尻島と波照間島における医療資源を広く探究し、これまでの調査結果をふまえて、2 島における医療資源のいかなる活用が今後の離島医療の多様性と持続性に繋がり得るかを検討した。

## 4. 研究成果

(1) 北海道利尻島では、「離島医療離れ」が見られる。子どもの親の世代に、プライマリケアではなく専門医療をもとめる傾向が強く、島内における専門医の不在に強い不満と不安をもっている。また、二次医療圏(利尻では稚内市)の中核病院に対する不信感も強い。そのため、定期的に札幌など都市部の医療機関に子どもを連れていく親や、そこで処方された薬とおなじものを島の診療所にもとめるという行動も見られる。他方、波照間島でそれはさほど顕著ではない。占領期を経験した沖縄県では、アメリカ式の地域医療システムが構築されたこと、島内の診療所と中核病院や本島の病院とがオンラインで繋がっていること、医師が 24 時間 365 日体制であるといった医療制度の相違が影響を与えている。

(2) これら離島社会における子どもの身体観・健康観・医療観は次のようにまとめられる。子どもは身体を成長との関連でとらえている。体格、運動能力、言語能力の変化を成長に結びつけ、下級生の面倒など社会性も成長の指標としている。より広い社会や自然環境との結びつきの中で身体をとらえる観念は見られなかった。健康観を構成する主要な要素は、食事・遊び・睡眠であり、手洗い・うがいなど予防と衛生に係わる要素も含まれている。これらは、家庭や学校での指導によって身につけられた観念と思われ、子どもの健康観とは規範的な側面が強い。子どもの多くは小さな病気やけがの経験を持ち、入院や手術を必要とする大きな病気を経験

し、島外の病院に通った子どもの割合は全体の3割に上った。子どもが受ける医療は現代医療であり、伝統医療は見られなかった。

こうした子どもの身体観・健康観・医療観は、親世代のそれとは大きく変わらないが、祖父母世代と親世代との間には明らかな違いが見られる。両島の共通点として、祖父母世代では専門医療(病院や売薬)とは別に、民間療法(薬草や温水を利用した対処療法)が多用されていたのに対して、親世代では専門医療が主流になり、民間療法は補助的になるか皆無となっていた。また、親世代に、子どもの行動範囲を制限し、子どもの身体を保護の対象とする傾向が強まっていること、

日々の生活の中で子どもに治療力を読み取っている親の態度が子どもの受療行動にも影響を与えていること、子どもの身体・健康・医療をめぐる観念は、親の観念や職業の影響を受けて多様化していることなどが明らかになった。

(3) その連続性/不連続性が生じる要因には、親を含む移住者の増加による価値観の多元化や、情報化等の社会構造の変化がある。離島と本土との関係性を背景とする離島社会の社会構造や医療環境、その近年における著しい変化もあげられる。

(4) 専門医の不在とう状況が子どもの身体と健康にもたらしている現象には、都市部の医療に依存するがゆえに起こる受診の遅延や抑制、それにともなって生じている子どもの身体状況の格差がある。また、経済的理由や時間的制約から島外での受診が控えられることもある。その結果、病気の早期発見や治療の開始が遅れている。

(5) 子どもの身体的状況に格差が生じ、また、祖父母世代の経験知との断絶が確認できる状況下において、種々の違いや格差が生じた要因について分析し、子どもの不利益を解消するための方策について検討することは急務である。今後の展望として、利尻島と波照間島の子どもたちが身体・健康・医療に関する知識と行動パターンを獲得する過程を、子どもを取り巻く社会・文化的環境や、離島の医療環境との相関において明らかにし、子どもの知識や行動の共通性を見出すとともに、その多様性や身体的状況に相違が生じる要因と結果を読み解き、離島特有の子どもの課題を整理したい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

道信良子: 人間の文化的多様性を理解する - 医学・医療系大学教育における文化人類学の貢献. 医学教育. 44(5): 274-278, 2013 査読有

加賀谷真梨: 人間学のキーワード「親密圏」. 月刊みんぱく. 37-9, 2013, p.20 査

読無

加賀谷真梨: 書評『癒しとイヤラシ エロスの文化人類学』田中雅一著 文化人類学 2013, 78-3, pp.432-435 査読無

道信良子: 研究を始めよう. シリーズ講座「臨床研究を行うために」北海道作業療法. 29(3): 118-122, 2012 査読無

道信良子: ヘルス・エスノグラフィー子どものフォトボイスを事例として. 第16回作業科学セミナー特別講演 作業科学研究. 6(1): 15-19, 2012 査読無 URL:

[http://www.jssso.jp/JJOS/JJOS6\(1\)/JJOS6\(1\)-04.pdf](http://www.jssso.jp/JJOS/JJOS6(1)/JJOS6(1)-04.pdf)

道信良子: 「子どものいのち」の理解に向けて. 民博通信. No. 136, 2012, pp. 28-19. 査読無

道信良子: 子どものいのち、そのとらえ方とかかわり方. 民博通信. No. 139, 2012, pp. 16-17. 査読無

道信良子: 「コミュニティで学ぶ社会医学 文化人類学の省察と実践を通して」『新しい医学教育の流れ'12冬』第43回医学教育セミナーとワークショップ/第6回医療系e-learning全国交流会(共催)ワークショップ「地域で社会医学を教える」の記録. 岐阜大学医学教育開発研究センター編 2012, 4, pp.40-46. 査読無

加賀谷真梨: プロセスとしての<共同体> - 沖縄・波照間島の「戦争マラリア」をめぐる語りを事例に. 東洋文化. 93: 79-97, 2012 査読有

加賀谷真梨: 「なんくるないさ~」とはいかない沖縄離島の高齢者福祉. 月刊みんぱく. 36-10, 2012, pp.22-23 査読無

道信良子: 書評『質的研究の方法いのちの<現場>を読みとく』波平恵美子・小田博志著 文化人類学. 2011, 76-2, pp.199-201. 査読無

道信良子: 「病むことの意味」『新しい医学教育の流れ'10夏』第37回医学教育セミナーとワークショップの記録. 岐阜大学医学教育開発研究センター編 2011, 1, pp.176-177, 185, 188-189. 査読無

[学会発表](計3件)

Michinobu R: Body, Health, and Medicine through the Eyes of School Children in Japan. The Society for Applied Anthropology 2014 Annual Meeting in Albuquerque. 2014, 3, 19. Hotel Albuquerque at Old Town, USA.  
Kagaya M: Friction in Values as

represented by children ' s body.  
The Society for Applied Anthropology  
2014 Annual Meeting in Albuquerque.  
2014, 3, 19. Hotel Albuquerque at Old  
Town, USA.

加賀谷真梨：沖縄島嶼部の子どもの民族  
誌—身体観・医療観に着目して. 比較家  
族史学会. 2013, 11, 16. 茨城キリスト教  
大学

〔図書〕(計1件)

道信良子：「健康・病気・医療」『文化  
人類学』第3版 波平恵美子編 医学書院,  
東京. p157-189, 2011

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

道信 良子 (MICHINOBU, Ryoko)  
札幌医科大学・医療人育成センター・  
准教授  
研究者番号：70336410

(2)研究分担者

加賀谷 真梨 (KAGAYA, Mari)  
国立民族学博物館・研究戦略センター・  
機関研究員  
研究者番号：50432042

(3)連携研究者

大西 真由美 (OHNISHI, Mayumi)  
長崎大学・医歯(薬)学総合研究科・教授  
研究者番号：60315687